

## 旧制岡山二中の校風の形成

—— 初代校長武居魁助を中心に ——

渡辺 一 弘  
(広島大学大学院・院生)

### I. 問題の所在

筆者はこの二年間本紀要において、「戦前期における中等学校文化に関する研究—岡山県を事例にして—」, 「戦前期における中等学校文化に関する研究—岡山県を事例にして (II)—」という題目で、岡山県の事例から後発旧制中学の学校文化を先発旧制中学の学校文化と比較しながら検討してきた。具体的には、大正中期開校の後発岡山二中の学校文化と、明治初期開校の先発岡山一中の学校文化とを『新教育社会学辞典』の「学校文化」の定義に従い<sup>1)</sup>、制服・制帽、校友会、寄宿舎、修学旅行・遠足・臨海学校、軍事教練、学校の教育方針、上級学校進学状況等に沿って、両校の学校史・校友会誌・卒業記念誌等を中心とした記述資料と卒業生・学校関係者への聞き取り調査を用いて比較検討してきた。その結果、後発の岡山二中の学校文化は、先発の岡山一中に比べて学校の管理が厳しく、質実剛健でスパルタ的な雰囲気強い反面、ガリベンでエリート的な雰囲気をもつ岡山一中に対して、大らかで、一大家族的な暖かい雰囲気をもつことを明らかにした。また両校がそれぞれ高等女学校と統合して新制高校になってからも、岡山一中のガリベンでエリート的な雰囲気と岡山二中の大らかで家族的な雰囲気が、それぞれの後身の高校において引き継がれていることを指摘した。

以上の分析の過程で、岡山二中開校以来、約25年間もの長きに渡り校長を務めた、初代校長武居魁助(たけすえ・かいすけ)が同校の校風形成において多大な影響を及ぼしていた、という指摘を非常に多く見聞した。そこで本稿では初代校長武居に焦点を当て、岡山二中の校風形成に特に大きな影響を持ったと思われる武居の個人史に注目しながら、彼の教育観の検討を通して、後発旧制中学の岡山二中の校風を検討することを目的とする。

従来の研究において、戦前期の教員の個人史やライフコースに関する研究は初等教員を対象としたものが多く(例えば、稲垣他編 1988)、中等学校教員を対象としたものは少ないように思われる。また中等学校

教員を対象とした研究においても、例えば二見(1993)が検討したように、地域中等教育史の一環として校長の教育者像に注目し、学校の史的発達や地域の文教的風土を明らかにしようとした研究は見られるが、校長と校風の形成の関係を主軸に検討した研究はあまり見られず、本稿の意義が見出せる。改めて武居に焦点を当てる意義を挙げると、主に以下の3点になる。

- ①岡山二中開校(大正10年)以来、昭和20年3月まで25年間もの長期に渡り校長を務めたので武居を検討することで、戦前期の学校運営の全体像をみることができる。
- ②武居本人と武居の関係者が書いた書物が刊行されており、貴重な資料が存在する。また現在武居の遺族と報告者が書簡を通じてのやり取りも行っている。
- ③武居は岡山県史、岡山人名録等はおろか、全国的な教育史の人物辞典においても取り上げられるような人物であり<sup>2)</sup>、著名な教育者であるにもかかわらず、研究対象として武居を取り上げているものは皆無である。

本稿では、岡山県立岡山操山高等学校(旧岡山二中・岡山一女の後身)同窓会が1991(平成3)年に刊行した『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』を分析資料として、武居の個人史に着目しながら武居の書き残した談話の草稿、筆を執った原稿を中心に、武居の岡山二中校長就任以前と校長就任以降の彼の教育観を検討していく。

なお本稿で用いている「先発校」「後発校」という言葉は、明治32年の中学校令改正(第二次)以前に開校した旧制中学を「先発校」、それ以降に開校した旧制中学を「後発校」と定義した。さらに後発校の中で、大正8年の中学校令改正(第三次)以前に開校した旧制中学は「地域先発校」と定義する。これは、時期的に後発校として開校した場合でも、地域においては最初に開校したり、「一中」という名称が付けられている学校もいくつかあり、地域における先発校として存

在している状況を考慮したためである。

## II. 分析資料『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』と武居魁助

本稿では、1991(平成3)年に刊行された『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』を分析資料として用いる。この本は「刊行のことば」によると、元々は武居を慕う教え子達が武居の「教育観内的生命観を窺う資料として編集」を行い、1950(昭和25)年に刊行した旧版『魁翁心語』に、岡山操山高等学校創立九十周年記念事業として武居の教えを長く後世に伝える目的で武居死後の翌年の一周忌追悼座談会の内容と「余の生い立ち」「不識菴老遺言」、武居への弔辞、旧職員・知友、同窓生、家族の思い出の手記その他を併せて新たに刊行されたものであるという。旧版の『魁翁心語』は、武居が亡くなる2年前に刊行されたもので、「念願」「励まし」「経営の片鱗」「病気の体験」「心の叫び」「法の掣」「雑録」の七つの章に分けられ、各章に武居が種々の機会に話した談話の草稿、いろいろと筆を執った原稿等が少ない章で3本、多い章では17本が収録されている。これらは、門下生の有志が相謀って、その中から一部を選んで編集したものであるという。なお言うまでもなく、書名は武居の名前に因んでいる。旧版の編者によると、当初武居は「私の死後ならいざ知らず、生前にはね」と本書の刊行に微笑みながら異を唱えたそうだが、結局教え子の情熱を諒として快諾したとのことである。また本書の刊行は、岡山二中卒業生に配布するのを第一義として企画したものではあるが、その他の希望者にも配布し、多彩な資料に富む生きた教育書として、「お子さんをお持ちになる方々」「師道のあるべき姿について思いを潜めて居られる人々」に対しても一読をお願いしている、とのことである。

武居は後の表1の略年譜に示したように、1885(明治18)年山口県下松市に生まれた。山口県徳山中学を二年修了後、山口県師範学校に入学、同校卒業後、同校附属小学校訓導を経て、広島高等師範学校数物化学部を卒業。その後、福島県師範学校教諭、岡山県師範学校教諭、岡山県視学を経て、1921(大正10)年、36歳で岡山二中校長に就任<sup>3)</sup>、1945(昭和20)年、60歳で同校を退職するまで25年間校長を務めた<sup>4)</sup>。1952(昭和27)年逝去、享年69歳であった。

## III. 分析結果と考察

### (1) 岡山二中校長就任以前の武居

表1 武居魁助略年譜

年	経歴
1885(明治18)	1月10日、山口県下松市大字東豊井(当時豊井村)の農家に父儀助、母マツの次男として生まれる。長男が夭折したため、姉三人の末っ子のひとり息子として成長。(0歳)
1891(明治24)	都濃郡隆松尋常小学校入学。(6歳)
1898(明治31)	父儀助死去。(13歳)
1899(明治32)	都濃郡隆松尋常小学校高等科卒業。同年、山口中学校徳山分校入学(*翌年独立して徳山中学校となる)。(14歳)
1901(明治34)	徳山中学校二年修了で家庭の事情により山口県師範学校入学。(16歳)
1905(明治38)	3月27日、山口県師範学校卒業。同年3月31日、山口県師範学校附属小学校訓導に任用。(20歳)
1907(明治40)	1月30日、古村勝太郎氏長女ヒデと結婚。同年4月、広島高等師範学校本科数物化学部数学物理学専攻入学。(22歳)
1911(明治44)	3月31日、広島高等師範学校本科数物化学部数学物理学専攻卒業。同年4月14日、福島県師範学校教諭に着任。(26歳)
1912(明治45)	4月16日、岡山県師範学校教諭に着任。(27歳)
1917(大正6)	10月25日、岡山県視学に着任。(32歳)
1921(大正10)	1月31日、公立中学校校長兼教諭(高等官七等待遇)に任ぜられ、新設の岡山県第二岡山中学校校長兼教諭に補せられた。(36歳)
1922(大正11)	文部省より欧米各国へ出張を命じられ、3月16日出発、同年10月30日帰国。(37歳)
1927(昭和2)	2月、母マツ死去。(42歳)
1929(昭和4)	甲状腺癌を患い、前後十二回の手術を受ける。(44歳)
1931(昭和6)	高等官三等待遇(*中学校長の最高)となる。(46歳)
1935(昭和10)	1月、国清寺に於いて人間佛教団総裁立田英山に初めて会う。(50歳)
1936(昭和11)	4月、両忘社協総裁岡志老師より、玄旨の道号を授けられる。(51歳)
1937(昭和12)	10月、次男正躬数え25歳で急逝。(52歳)
1938(昭和13)	正五位勲五等に叙せられる。(53歳)
1940(昭和15)	文部大臣より表彰を受ける。(55歳)
1944(昭和19)	従四位に叙せられる。12月、病氣再発し、二回の手術を受ける。(59歳)
1945(昭和20)	3月31日、願いにより岡山県第二岡山中学校校長を退職。(60歳)
1946(昭和21)	4月、長男知也数え35歳で死去。11月13日、岡山県議会で県選挙管理委員会委員に選ばれ、初代委員長に就任。同年、家事裁判所調停委員(*昭和23年まで)。(61歳)
1949(昭和24)	3月3日、人間佛教団総裁耕雲老師より、不識の庵号を授けられる。県選挙管理委員会委員長に再任されるも辞退。(64歳)
1952(昭和27)	病氣再発のため入院したが、8月19日自宅で逝去、享年69歳。法名(戒名)は「不識院釈魁翁玄旨居士」。

出典：『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』、『創立七十年史』、『創立百年史』、『尚志 会員名簿 昭和30年版』より作成

先ず武居の岡山二中校長就任以前について、『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』(以下『魁翁

心語」と略記)の「余の生い立ち」の記述を基に彼の個人史を簡単に整理しておく。なお以下の鍵括弧の文章は、特に但し書きがない限り『魁翁心語』における武居の文章からの引用である。

幼年時代の武居は、親に対しては随分我が儘で友人に対しては乱暴な餓鬼大将であった、と述べている。その背景には、三代も婿養子の続いた家にやっと生まれた長男が6歳で夭折し、その時母親は既に不惑に達しており、「其の翌年—明治十八年—思いがけなくも余が生まれたので一家の喜びは更に譬えようもなく、父母は舐襖の愛に陥りはしないかと思われる程熱愛して余を養育したものであった」とのことである。この状況はやがて、「而して斯かる乱暴な行動も十三歳のとき、父の思いがけなき死によって大なる衝動を受け、只一人の老いたる母に此の上心配をかけては相済まぬという強い自覚の擡頭と共に、ぱったり止んでしまったのである」と変化し、武居自身に「少年時代に余が我が儘者であったということの自覚と反省は、其の後の余に大なる自制と自奮とを促し、不肖の余をして兎も角今日あるを得しめた大きな原因をなして居ると思う」と自覚させている。このことは、後に岡山二中学校に就任してからの武居に接した多くの人たちが述べている、堅実、厳正、用意周到、誠実といった武居の印象からも確認でき、父親の死が最初の武居のターニングポイントと考えられる。また母親に対する思いは、後に武居が母親の希望で広島高等師範入学直前に結婚したこと、広島高等師範学校入学以降、広島・福島・岡山と移る度に母親と共に暮らした<sup>5)</sup>ことから、特に強いものであったと考えられる。

小学校時代は「家庭では随分我が儘な子であったが、学校では之に反して順良な生徒であった」と述べていて、学業の方は尋常科三年の頃から頭角を現し、特に算術と読み方が好きであり、課外で習った漢文にも興味を覚えた、と語っている。小学校卒業後は、従兄の士官学校入学が羨ましく、軍人を志望して徳山中学校に入学したが、「其の後、母を初め親族の人々の中に、余の軍人志望に不賛成を唱え師範の入学を慫慂するものが出て来たり、周囲の事情上余も無下に之を斥ける訳にも行かなくなり、遂に中学の方は二年の終り頃に退学し、全然性質を異にする師範学校に方向転換したのである」とのことである。ここで述べている「周囲の事情」とは、おそらく中学入学前年の父親の死と武居が一人息子である、ということに関係していると思われる。山口師範学校に入学後は初めて親元を離れて寄宿舎に入ったが、規律の厳しい師範学校の寄宿舎生活にも直ぐに慣れて、「寧ろ後には大なる愉快を感じるに至ったのである」と述べている。師範学校入学以

来、常に学級において責任ある地位にあった、と自ら語っている武居は、四年生になって寄宿舎の会長に選ばれており、師範学校の生徒全体のリーダーであったようである。

山口師範学校卒業後は、直ちに同校附属小学校の訓導に任用されている。岡山二中の教え子で、『魁翁心語』で武居の生涯を解説している金谷によると、このことは武居の師範学校在学中の人物・学業が認められたためであろう、と指摘している<sup>6)</sup>。僅か二年の勤務の後、広島高等師範学校に入学するが、「この二年間の経験は、高師卒業後の活動に裨益する所が少なくなかったと信じて居る」と述べている。高等師範学校入学の理由は、「軍人志願より教員に転向した以上は更に高師に進みたい」との希望があったためである。なお高等師範学校入学直前に結婚しているが、当時既に武居の母親は60歳を越えており、家つきの孫の顔を見て死にたいという母親の強い希望により、早婚と知りつつ結婚した、と述べている。高等師範在学中は、同期の大賀矢太郎(岡山二中初代教務主任)によれば、在学中から既に老成の風格があり、学友から尊敬されていた、という<sup>7)</sup>。

広島高等師範学校卒業後は、一年間の福島師範学校の勤務を経て岡山師範学校に着任している。岡山師範学校では、教諭兼訓導舎監として数学を担当している。その後32歳で岡山県視学に任ぜられたが、これは当時の県知事が教育行政の一新をはかるために師範学校長に候補者の推挙を求めた結果であり、武居の県視学としての業績はかなり後まで語り伝えられていたという<sup>8)</sup>。岡山師範の教え子小松原によると、県の視学時代武居が、「今自分は、今までの視学が訪問しなかった僻地の学校を自転車で回っておるが大変だよ」と語ったのを記憶しているという<sup>9)</sup>。

以上が岡山二中学校長就任以前の武居の個人史の簡単な概観である。幼年時代に我が儘であったのが、父親の死後真面目になったこと、母親の強い影響を受けていること等が特徴的であるといえる。また進学については、師範学校卒業後小学校の訓導を経て高等師範学校に入学するという進路パターンは、当時として珍しいものではなかったが、中学を中途退学後軍関係の学校に入学するのではなく、師範学校に入学するという進路パターンは珍しいものであったと推察される。

## (2) 武居の教育観

岡山二中学校長就任以降の武居の教育観について、『魁翁心語』の「念願」「励まし」「経営の片鱗」の各章を中心に、家庭教育、学校教育、学校経営等についての記述の検討を行う。なお各章のそれぞれの節に相

当する原稿の題目は〈 〉で示した。

## 1. 「念願」の章

この章は、昭和7年から昭和17年にかけての父兄会に於ける談話要項9つの節から構成されている。この章では主に、家庭での教育、教師の教育、訓育、校風等について触れてある。先ず武居は家庭の教育力というものを非常に重要視していたことが伺える。〈教育と親心〉で、以下のように家庭の教育力の重要性を強調している。

「学校は人を教育する専門の場所ではありますが、子供に及ぼす感化影響の力は寧ろ学校よりも家庭の方が大であると思います。(中略)思うに学校は教育という仕事の荒削りをする場所でありまして、其の仕上げをする場所は家庭であります」(昭和7年11月12日父兄会に於ける談話要項)

一方、教師として斯くありたいと願っている教育精神の一端は、〈教師としての私の念願〉で以下の三点を述べている。

「一、私は教育精神として真実なる愛の心が大切だと思うのであります。(中略)二、私は教育精神として真に生徒を信ずることが大切だと思うのであります。(中略)三、私は教育精神として真に教育の道に奉仕し、生徒の為ならば如何なる苦勞も厭わぬという信念が大切だと思うのであります」(昭和8年11月10日父兄会に於ける談話要項)

ここで最初に示されている「愛の心」が、岡山二中の校風の特徴として多くの学校関係者から指摘される「心の教育」「魂の教育」「全人教育」等々の文言に繋がっていると考えられる。文字どおり〈魂の教育〉では、  
「(略)併し真の教育の目的は申すまでもなく、真に良き日本人を作るにありまして、其の真諦は外面的な知識教育に存するものではなくして、人格の真髄に触れる魂の教育に在ると信じますので、此の点につきましましては更に一層力を尽くして居るのであります」(昭和10年11月9日父兄会に於ける談話要項)  
と述べており、武居が学校教育において、知育以上に訓育重視の志向であったことがわかる。この訓育重視の背景には、師弟の良好な関係が必要で、それがやがては校風の確立に繋がると〈師弟の情誼〉で以下のように述べている。

「(略)善良なる校風の確立には、師弟の情誼が敦厚であることが最も肝要であると存じます。即ち師弟の情誼の敦厚なると否とは、教育の効果を納める上に重大なる関係があると信じます」(昭和11年1月7日父兄会に於ける談話要項)

ちなみに学校史によると、武居が校風の中心要素として特に要望したのは、「真摯努力の習慣」「克己奮闘の

習慣」「質実剛健の気風」「自律自重の精神」「愛校自治の精神」であり、この五要素が、それぞれ順番に1年生から5年生までに配当して訓練の重要目標とされたという<sup>10)</sup>。

## 2. 「励まし」の章

この章は、其の一(6つ)、其の二(3つ)、其の三(8つ)と大きく3つの部分に分かれ、全部で17の節から構成されている。其の一は大正15年から昭和9年にかけて同窓会誌に所載された原稿である。其の二は大正15年から昭和12年にかけての卒業式の訓辞の原稿である。其の三は大正13年から昭和11年にかけて校友会誌に所載された原稿に、戦後退職後に岡山操山高校関係の会誌の類に所載された原稿1つを加えたものである。この章では主に、在学生・卒業生への希望を通して学校の評価、校風等について触れてある。武居は学校の評価については、〈希望と所感〉で、

「凡そ学校教育の価値評価に当たっては、在学生徒の成績よりも、寧ろ卒業生の社会に於ける活動の実績に重きを置くべきであると思う」(昭和5年7月同窓会誌所載)

と当時の多くの中学が学業成績で評価されていた風潮に対して、異を唱えている。またこの発言は、先発校でエリート進学校の岡山一中を多分に意識したものとも推察できる。卒業式の訓辞においては、「人格」「誠」という言葉を何度か説明している。〈何事も誠の一つ〉では、

「人格の充実を図るということは人格の価値可能性を十分に発揮することであるが、余は人格価値の中最も貴いものは至誠であると信ずる」(昭和3年3月5日卒業式訓辞)

と述べている。ここでも武居が心の教育、訓育を重視していたことが伺える。このことは校友会誌の記述にも同様に見られる。例えば〈益々善良なる校風の発揚を望む〉では、以下のように良い校風確立のためには訓育が大切である、と述べている。

「善良不動の校風樹立によりて学校内に道徳的空氣の瀰漫するに至らんか、言説を用いずして生徒の徳性は自ら涵養せられ人格は自然に陶冶せらるべし。されば善良なる校風の確立は訓育の基調をなすものにして学校教育上最も緊要のことなりとす」(昭和4年12月校友会誌所載)

そしてその結果校風の基礎が作られ、以下のような美点が挙げられるという。

「(略)就中温順素直の性情、上下親和の風習、規律整頓の習慣、勤勉真摯の態度等の特に顕著なると、近時質実剛健の気風、愛校自治精神等の著しき発揚を見るに至れるが如きは先ず其の主なるものと謂う

べし」(同上)

### 3. 「経営の片鱗」の章

この章は、大正14年から昭和11年にかけての記念式典における式辞、国や県への答申等5つの節から構成されている。この章では主に学校の教育方針、岡山県の県民性、学校経営等について触れてある。〈落成式式辞〉では学校の教育方針の概要について述べているが、ここでも冒頭で訓育について、

「本校に於いては訓育に最も重きを置く考えであります」(大正14年4月25日)

とあり、生徒の修養、質実剛健の校風の発揚、人格の陶冶等五つに渡って武居の考えが説明されている。岡山県の県民性については〈本県県民性の短所矯正に関する文部大臣への答申〉で、岡山県の県民性の短所、長所を指摘し、短所矯正の方案と長所助長の方案を述べている。おそらくこれに基づいて〈本県中等学校長会議に於ける県の諮問に対する答申〉で、職員組織に関して特に留意する事項5点の中で、

「3. 本県出身者の数を全職員の三分の一以内たらしめんとすること(創立当初暫くの間は希望通り運行しつつありしが、中途教員払底の時代に遭遇し、意の如くならざるに至り)。4. 本県県民性と反対の人情風俗を有すると認めらるる地方の出身者を特に若干加うること」(昭和11年9月17日)

と述べている。なおその他の3点は、1. 様々な経歴の者を適当な割合で採用すること、2. 学力の優秀な者以上に、生徒の訓育に大いに貢献する者の採用に注意を払うこと、5. 職員組織上重点を置くべき学科をも考慮に入れること、である。これらのことは、〈学校経営研究会に於ける説話〉の「職員」の箇所でも重複して指摘している。ここでは教育方針、職員、学級経営等について述べている。学級経営については、

「学級は学校を一つの有機体と見るときは其の最も重要な一機関であって、単に教授を行う一単位とのみ見なすべきものではなく、真に生徒の生活訓練をなす神聖なる道場でなければならぬのであります。従って其の生活中に於て共同、自治、規律、責任、親和、勤労、奉仕等の諸徳の涵養を図ると共に、その努力の反影として善良なる級風の発現を期すべきであります」(昭和8年11月)

と述べており、そのために教師が生徒と接する機会として、通常の学級担任の訓話、級会、父兄会、家庭訪問等以外に、校長の学級別訓話や家庭要録の作成を行っている、と説明している。なお武居は校長として在職中、一年生と五年生の修身科の授業を常に担当していた<sup>11)</sup>。校長自ら生徒と接する機会を多く持ち、重視する訓育を実践しようと志向していたことがわかる。

以上が『魁翁心語』の武居の文章から検討した彼の岡山二中校長就任以降の教育観である。全体を通して、心の教育、訓育を重視し、その実践に取り組むことが岡山二中の良い校風の確立ために不可欠である、と考えていたように伺える。

### IV. まとめ

以上『魁翁心語』を分析資料として、武居の岡山二中校長就任以前についての個人史の整理と、岡山二中校長就任以降の武居の教育観について検討を行った。その結果岡山二中の校風の形成にあたっては、武居の訓育重視の姿勢が質実剛健でファミリー的な校風の形成に影響を及ぼしていることが明らかになった。そしてその背景には、武居の家庭教育重視の教育観があり、このことは武居の個人史から、幼少時において母親から強い影響を受けたことが理由であると思われる。

しかし今回の分析において、岡山二中のスパルタ的で厳しい雰囲気については検討することができなかった。このことについては、『魁翁心語』の「武居先生一周忌追悼座談会」において、元部下の教員が「(大きな親心をもつ武居が、生徒に対して)創業時代、厳罰主義をとられたのはなぜでしょうか。すごく疑問に思っているのですがね」と疑問を呈している<sup>12)</sup>のに対して、参加者で岡山二中開校時の教務主任で、広島高等師範学校時代の同期生でもある前出の大賀矢太郎は、「(略)厳罰主義のことですがね、あれについては責任の大部分は私にあるでしょう。尤もその一部は正田君(\*開校時の教頭)、新井君(\*開校時英語科教諭、寄宿舎舎監)にも分担して貰わなければなりませんかね。(中略)一度カンニングしても即座に退校ということにしたわけですよ。まあ、我々のこの強い輿論を校長としても抑え切れなかったのでしょうかね」と述べているくらいである<sup>13)</sup>。今後、検討する余地がある。

また本稿の分析においては、『魁翁心語』各章の記述を時系列的には分析しなかったが、この点も検討の余地がある。それから表1の略年譜に示した武居と宗教の関係<sup>14)</sup>、欧米教育事情視察、自分自身の大病、相次ぐ子供の死、についても今回の分析では触れなかった。『魁翁心語』には武居の人生観、宗教観一特に禅について、外国の教育、病気等についての記述もある。今後の課題としては、上記の点を考慮に入れ、武居の人生観、宗教観を中心に武居の個人史の後半部分に焦点を当て、岡山二中の校風との関係を検討していきたい。

## 【注】

- 1) 日本教育社会学会編 1986,『新教育社会学会辞典』東洋館出版社 117-118頁。
- 2) 例えば『岡山文庫 48 岡山の教育』では、唯一取り上げられた旧制公立中学校の校長であり、全国的な教育史の人物辞典等においても「岡山県の中等教育」の項に記載のある9人中唯一人の公立学校の校長であった(唐沢編 1984, 下巻 414-416頁)。
- 3) 当時36歳で公立中学の校長に就任することは珍しいことではなかった。例えば武居と同窓で広島高師を明治38年卒業,更に明治42年京都帝大を卒業した長坂五郎は,大正6年に岡山中学(\*後の岡山一中)の教頭となり,翌大正7年には35歳の若さで高梁中学の校長に就任している(記念誌『岡山尚志』編集委員会編 1989, 2頁)。
- 4) 大正期に公立中学校長に就任し,25年間も務めたことは異例だといえる。筆者の算出によると,明治末から昭和初期にかけて就任した校長の平均在任期間は,岡山一中の場合で約9年2ヶ月,高梁中学で約6年8ヶ月であった(岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料館 2000,岡山県立高梁高等学校有終資料刊行会 1992)。武居は自分の信念に基づき,岡山一中の校長への再三の栄転話を断り,長期間に渡り岡山二中の校長を務めたことが学校史をはじめ,多くの学校関係資料に記載されている。
- 5) 武居の母親は,広島・福島・岡山と,郷里の家も1ヘクタールを越す田畑も処分して,武居に影のようについて回り,その教育に,その世話にと,母性愛の限りを尽くした,とのことである(「魁翁心語」編集委員会 1991,小松原次郎「武居先生と岡山二中」373頁)。
- 6) 「魁翁心語」編集委員会 1991,金谷達夫「解説 武居勉助先生の生涯」410頁。
- 7) 同上 1991, 411頁。
- 8) 同上 1991, 411頁。
- 9) 同上 1991,小松原次郎 前掲 370頁。
- 10) 岡山県立岡山操山高等学校 1969, 207-208頁。
- 11) 「魁翁心語」編集委員会 1991,岩佐守一「武居先生を憶う」301頁。
- 12) 同上 1991,「武居先生一周忌追悼座談会」349-350頁。

13) 同上 1991, 351頁。

14) 武居と禅との関係については,学校史をはじめ多くの学校関係資料に記載がある。また武居の四男俊郎氏(元高梁高等学校校長)によると,武居は広島高等師範学校在学中より,禅やキリスト教に関心をもっていたそうである。

## 【分析資料以外の主要参考文献・資料】

- ①秋山和夫 1972,『岡山文庫 48 岡山の教育』日本文教出版社。
- ②二見剛史 1993,「加治木中学校(旧制)と谷山初七郎」『鹿児島女子大学研究紀要 第15巻 第1号』255-276頁。
- ③稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編 1988,『教師のライフコース—昭和史を教師として生きて—』東大出版会。
- ④唐沢富太郎編 1984,『図説 教育人物事典—日本教育史のなかの教育者群像—上巻・中巻・下巻』ぎょうせい。
- ⑤記念誌『岡山尚志』編集委員会編 1989,『岡山尚志』尚志会岡山県支部。
- ⑥岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料館 2000,『岡山朝日高等学校沿革年表』。
- ⑦岡山県立岡山操山高等学校 1969,『創立七十年史』。————— 1999,『創立百年史』。
- ⑧岡山県立高梁高等学校有終資料刊行会 1992,「高梁中学校教育要覧」(昭和11年1月「有終」創立四十周年記念号より抜粋)「有終—高梁中学校—」。
- ⑨尚志会 1955,『尚志会員名簿 昭和30年版』。
- ⑩創立三十周年祝賀会 1950,『創立三十年史』岡山県第二岡山中学校・岡山県立岡山第二高等学校。

《付記》 分析資料の引用に際しては,旧字体の一部は新字体に改め,句読点や濁点を付した。本研究に関しては,岡山二中・岡山操山高等学校関係者の皆様に大変お世話になった。特に武居勉助の遺族,四男俊郎氏(元岡山県立高梁高等学校校長)には,書簡で貴重なご意見を伺い,また資料も戴いた。その他の資料収集については,元広島大学ナノデバイスシステム研究センター大学院生原裕裕氏(現本田技研栃木研究所)の御協力を得た。記して謝意を表したい。